

『純白の愛に傳く』

著：妃川 螢

ill：乗りよう

ホテル内を見てまわって、スタッフの接客をチェックして、それだけでこのホテルの経営状況を読み取ったのだ。

「ここを買い取らなければ、まだ救いはあったのだろうが、もはやどうにもなるまい」

磁器が、耳障りな音を立てる。

懸命に濃い色の瞳を見返しながらも、突っぱねる以外に、返す言葉を探せなかった。

「君には——」

「関係ないと、意地を張るのは勝手だが、近いうちに潰れるぞ。ロクに現場視察もしていないようでは先は見えている。屋敷の使用人や、このホテルの従業員、ほかの事業にかかわる社員たちの生活をどう保証するつもりだ？」

トップとしての姿勢を問われると同時に、目を背(そむ)けることのできない現実を突きつけられる。

現場を見もせず、数字ばかり追っていたのだろうか？ と……。

現状は、退職金どころか当月の給料すら支払えるかどうかというギリギリの自転車操業だ。破綻すれば、皆が路頭に迷うことになる。この不景気のさなか、ほかの仕事を幹(あつ)旋(せん)することも難しいだろう。

「おまえには、彼らに対する責任があるはずだ」

それは、幼いころから伯爵家を継ぐ者としての心構えを厳しく教え込まれてきたセシルにとって、何より重い言葉だった。辛くつけられた点数よりもずっと、現実を見つめさせる指摘だった。

——君になら現状を変えられるのか？

返すべき言葉は、喉元まで出かかって、けれど最後に残ったプライドがそれを舌にのせるのを邪魔する。

私的な感情だ。

ごくごく私的な、プライドというほどのものでもない、些(さ)細(さい)な思い出に裏づけされた反発心。

そんなものが邪魔をして、セシルに口を閉じさせる。

「改善点が明確なら、君でなくてもいいはずだ。コンサルタント業で成功している人物はいくらでもいる」

口から零(こぼ)れたのは、真逆の言葉。

ウォルフは、呆れたように笑って、エスプレッソを飲み干す。

「俺以外の男を頼るといえるのか？」

妙に引っかかる言いまわしだった。意図的に悪辣な言葉を選んでいるようにも聞こえる。その意図を、つづく行動で教えられた。

腰を上げたウォルフに傍らに立たれて、セシルは威圧感に息を呑んだ。視界に影が落ちているだけで、なぜこれほどに追い詰められた気持ちになるのか。

椅子の背に置かれる大きな手。

長身が屈(かが)められて、視線を上げれば、濃い色の瞳が間近にあった。

「……っ、なに……っ」

手にしていたティーカップを奪われ、テーブルに置かれる。その間も、ウォルフの視線はセシルを捉えたままだ。

その瞳を、じっと見つめ返す。

瞳を伏せなければならぬいわれはない。

「美しい伯爵閣下の依頼なら、助力を惜しまない輩はいくらでもいるだろうな。だが、そいつらこそがハイエナではないと、どう判断する？」

「それ…は……」

おまえよりマシだろうと、言い返したいのに躊躇ってしまうのは、心のどこかに見知った顔への安心感があるからだろうか。まったく相容れない相手だとわかっているのに、それでも、見ず知らずの相手よりは信頼できるかもしれないなどと、甘い考えを捨てきれないでいるのだろうか。

濁した返答は、揺れる心情の表れだ。

敏い男が、それに気づかないわけがない。

「俺なら、おまえを助けてやれる。王の学徒(King's Scholars)の名にかけて、悪いようにはしない」

イートン校の奨学制度のことを、キングズスカラーという。優秀な人材を国費で育てる名目で設けられているものだ。黒いガウンの着用を義務づけられた一団は、いずれ社会にその頭脳を役立てるために学ぶことを求められる。

他愛ない言葉の呪文だ。

セシルの心理に何が一番訴えかけるのかを、ウォルフは知っている。パブリックスクールの制度に刻まれた英国の歴史。それに誓いを立てられれば、ほかのどんな口説き文句よりも、セシルの心情を揺さぶる。

啞然と見上げる視界いっぱい、端正な顔が近づいた。声も近くなる。体温も。ドクリ…と心臓が嫌な音を立てた。

薄く開いた唇を、予期せぬものによって塞がれる。

——……っ!?

目いっぱい見開いた視界には、たしかについ今さっきまで間近に映していた端正な顔があるはずなのに、近すぎてそれと認識できない。

突然のことに硬直した肉体は自由にならず、結果、男の勝手を許してしまった。

奪われた唇は強張って、不(ふ)埒(らち)な舌の侵入を許してしまう。けれどセシルは硬直したまま。

ややして、唇を塞いでいた熱が離れる。

「少くくは反応が欲しいものだな」

人形ではつまらないと、揶揄の言葉が鼓膜に届いて、セシルは反射的に硬直を解いていた。

「何をする……っ」

振り上げた拳を止められ、椅子から引き上げられて、腰に腕がまわされる。

「それくらい気丈なほうがお似合いだ、閣下。——初(う)心(ぶ)なあなたも可愛らしいが」

経験値の低さを揶揄されて、カッと頬に血が昇る。キスひとつまともに応じられない

ことで、いかに素のセシルが幼いままか、ウォルフは察したのだ。

「ぶ、無礼な……っ」

はねつける声も震えるばかり。

「イートン校在籍中に、よくも毒牙にかからなかったものだ。牽制し合って勝手に潰し合っていた取り巻き連中に感謝しなくてはな」

もはや憤りの言葉もなく、頭のとっぺんにまで沸騰した血が昇ったものの、あまりのことに吐き出す言葉も見つけられない。

なんとか拘束から抜け出そうと暴れても、赤子の手をひねるように封じられて、またも唇を合わされる。

滑(ぬめ)った熱いものが今度は口腔の奥にまで侵入してきて、蠢(うごめ)くそれに口蓋を舐められた途端、セシルの背筋に震えが走った。膝から力が抜けて、屈強な肩を押し返していたはずの手が、スーツの生地には皺を寄せる。

不慣れなセシルは瞬間に男の手管に流されて、その胸に縋るばかりになってしまった。体内から不埒な水音が響いても、その意味を理解するどころか考えることも不可能だった。

たっぷりと貪られて、唇が解放されたときには、もはや息も絶え絶え。ぐったりと身体をあずけているよりない。

その耳に、愉快げな声が落ちてくる。

「美しく気高い伯爵閣下に手をつけてしまった責任は取らねばなるまいな」

言われた言葉の意味を、理解できない。男の助けを借りることとこの行為とが、セシルには結びつかなかった。先にウォルフが口にした「ハイエナ」という言葉の意味を、正しく理解していないことが知れる。

「……な、にを……」

舌が痺(しび)れて呂(ろ)律(れつ)がまわらない。唇は腫れぼったく、視線すら定まらない。指の腹に唇を拭かれて、そんな刺激にも背がそそけ立った。

明るい青の瞳が潤んで、その中心に黒い影を映しだす。

純白の天使を搦(から)め捕った悪魔がごとく、その影はニヤリと狡猾な笑みを浮かべた。

「その純潔を俺に差し出せ。それだけで、すべてが丸くおさまる」

ぼやけていた視界が、ふっと焦点を結んだ。

そこに見たのは、天使でも悪魔でもなく、ただの牡だ。ギラリとした光を宿す瞳が、セシルに事態を突きつけた。

本文 p39～45 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>